

左側上顎犬歯に発症した含歯性嚢胞の一症例

○宮崎修一、*新村健三、*竹内靖博、
*大野和夫、*蓑下隆盛、
*迎 宮世、瀬尾令士
瀬尾歯科クリニック、
*熊本 B.P.C 小児歯科研究会

今回、13歳女児で右側上顎側切歯胚の先天欠如を伴い、左側上顎犬歯に起因して発症したと思われる含歯性嚢胞の症例に遭遇した。治療に際して、開窓後嚢胞を摘出し矯正処置により牽引しながら4年間の咬合誘導を実地した結果、興味ある知見を得たので報告する。

<症例>

(患児) 13歳、女児

(初診日) 1997年5月24日

(主訴) 左側上顎犬歯の萌出遅延

(既往歴) 初診より2年前の1995年に両側上顎第一小臼歯の萌出スペースを確保し、適切な萌出を誘導する目的で両側上顎乳犬歯を抜歯。両側上顎乳犬歯は根 $\frac{1}{3}$ ～ $\frac{1}{2}$ 吸収し、著しい動揺を認めたが生活反応を示した。

<口腔内所見>

現在、Hellmanの咬合発育段階ⅢCである。右側上顎側切歯、左側犬歯及び左側下顎第二小臼歯の歯牙は認められない。左側上顎側切歯は矮小歯を認める。右側上顎中切歯、左側中切歯、左側側切歯間に隙を認める。右側上顎側切歯は萌出スペースが不十分である。左側上顎犬歯相当部の唇側歯槽骨は硬く膨隆している。左側下顎第一大臼歯は近心傾斜し第二小臼歯の萌出スペースが喪失している。

<X線所見>

・左側上顎犬歯は未萌出であり左側上顎側切歯の根尖部付近に位置し、埋伏状態にある。その歯冠部周囲は嚢胞様組織を思わせるX線透過像で包含されている。また根は未完成である。

・右側上顎側切歯は欠如している。また左側下顎第二小臼歯は第一大臼歯の近心傾斜に伴い萌出スペースを喪失し、根末完成の状態で顎骨内に埋伏している。

<処置及び経過>

観血的処置を施し左側上顎犬歯部を開窓し同部の腫瘍物を摘出後、創部の治癒を待つて矯正処置により左側上顎犬歯を牽引し全体の咬合を誘導した。

診断が困難であった上顎左側臼歯部歯根嚢胞の一症例

○小笠原榮希、*原 巖、豊村純弘、本川 渉
福歯大・小児歯、*福歯大・口外

いわゆる歯根嚢胞は日常臨床で少なからず遭遇する病変である。今回、臨床所見からは歯根嚢胞と特定できず、診断に苦慮した症例を経験したので報告する。

患 児：17歳6か月、男子

初診日：平成14年3月22日

主 訴：上顎左側臼歯部の腫脹および圧痛

家族歴：特記すべき事項なし

既往歴：アレルギー性鼻炎、4|4抜歯

現病歴：平成8年12月、当小児歯科に来院し、|5部頬側歯肉膿瘍にて切開を受ける。その後、症状は消失するも、平成9年3月に再発。当大学口腔外科にて鼻性上顎洞炎を疑い、耳鼻科へ転院。抗生剤投与にて症状は消退した。平成14年3月17日上顎左側臼歯部歯肉に腫脹を認めたため近医を受診。切開を施行されたが改善せず、腫脹部の増悪傾向を認めたため、平成14年3月22日、当小児歯科に来院。

口腔外所見：左側頬部に軽度の腫脹を認めた。口腔内所見：Hellmanの歯齢IVC。|56頬側歯肉の腫脹、軽度の圧痛を認めた。同部に病的動揺、打診痛は認められず、歯髓電気診断に対して生活反応を示した。

X線所見：デンタルX線写真で|56歯根を含む透過像、パノラマX線写真で左側上顎洞底部にドーム状のX線不透過像を認めた。

治療ならびに経過：腫瘍性病変の可能性もあったため、当大学口腔外科に依頼し、CTおよびMRIを撮影。|56相当部顎骨内嚢胞との臨床診断の下、当小児歯科にて|56抜髄即日根充の後、平成14年4月2日、全身麻酔下にて嚢胞摘出、|56歯根端切除、8|8水平埋伏歯抜歯を行った。術後の病理組織学的診断で歯根嚢胞と診断された。現在、予後良好である。